

## 大賞 国土交通大臣賞

## 女川駅前レンガみち周辺地区

所在地

宮城県女川町

地区面積

約 6.6 ha

応募者

宮城県女川町、女川町復興まちづくりデザイン会議、独立行政法人都市再生機構宮城・福島震災復興支援本部、おながわまちづくりJV(鹿島・オオバ女川町震災復興事業共同企業体)、東環境・建築研究所+株式会社ブラッドデザイン、女川駅前商業エリア景観形成推進協定運営委員会、おながわレンガみち交流連携協議会

## 地区の概要

平成23年3月11日東日本大震災で発生した津波により、女川町では生活に必要なほぼ全ての機能が失われた。当地区は、新たに生まれ変わった女川町のシンボル空間であり、女川駅前広場とそこから女川湾に伸びる「レンガみち」を軸に商業・業務、交流、公共機能が集積するにぎわい拠点である。

「レンガみち」の沿道には、集客のコアとなる「シーパルピア女川」をはじめ種々の施設が立地し、海への眺望を生かして女川の新たな顔となる景観を生み出している。周囲の自立再建店舗・事業所においても、地域主導型で設立された委員会が、各事業者と建物デザインに関する協議を事前に行いながら、魅力的な景観形成に努めている。

拠点施設が揃った平成29年5月のGWには、特別なイベントなしに町人口の10倍を超える7万7千人の来訪者が押し寄せた。また復興まちづくりの先導的モデルとして、多くの人々から注目を集めている。

平成30年4月には、「にぎわい拠点」の第二期造成工事が完了し、更なる自立再建店舗・事業所の集積が図られる。平成32年夏には、「レンガみち」延長線上の「メモリアル公園」、「海岸公園(仮称)」の一部が供用開始予定であり、更なる魅力の向上が期待される。



駅前広場から女川湾を一直線につなぐ「レンガみち」は、女川町中心市街地のシンボル軸として、「海を眺めて暮らすまち」という町の骨格を形成している。「レンガみち」の線形は、元旦の日の出の位置に正確に向けられている。



「レンガみち」の幅員は、 $4.5+6.0+4.5$  (= 15m) で構成される。中央部分には、並木と照明灯を二列に配置し、海への眺望軸を形成している。沿道には木造大屋根が特徴的で集客のコア施設である「シーパルピア女川」が立地し、レンガみちへのデッキ張り出しや舗装の滲み出しによって、にぎわいの共有を図っている。

## 審査講評

東日本大震災からの復興まちづくりについては、余りに広い被災地、甚大な被害のため、質より量、質よりスピードといった考え方が一般的とも言える。良好な都市空間、都市景観形成への取り組み姿勢は、ややもすると迅速な復興を妨げる要因になるのではないかと、否定的とまでは言わないが、避けられているようにさえ見受けられる。そのような状況、風潮の中スピードとともに質を追いかけ、それを実現させた女川町の復興事業は希有な例と言えるだろう。応募地区は復興後の女川町の中心となる地区で、この地区を含む広い地区における大胆な区画整理手法の活用がこの事業の鍵を握っている。この復興まちづくりでは、居住地区を高台に移転させる必要性から、低地部は非居住系の利用となり、そこにあった被災者の土地を高台と入れ換え、駅前のこの地区に町有地をまとめることで、駅前商業地区を一早く実現した。その上で、デザインチームによるしつこいとも思える質の追及、そしてガイドラインに基づく個別建物の誘導など、良好な都市空間実現のためにつけられた大きなエネルギーを感じる。まさにゼロから作る町で、できる限りのことを限られた時間の中で実現した。この事業の構図を作った町長をリーダーとする行政、これに応えたUR及びその実働部隊となったコーディネーター、多彩なデザイナーたちの見事な協業。今回の復興事業で二つ目があるのかは疑問であるが、まさに復興都市デザイン、復興事業による景観形成の優良事例といえよう。(高見)



駅の正面を人の空間として開放し、「レンガみち」と一体的にデザインされた駅前広場。駅の北側には芝生広場と「女川フューチャーセンター Camass」を配置し、大人から子供まで、町内外の人々がにぎわい、集える空間を創出している。



「レンガみち」を舞台とした結婚式。式の出席者だけでなく、町民や観光客も一緒になって新郎新婦を盛大に祝う。官民が一体となって作り上げた都市空間が、皆に愛され、笑顔あふれる場となっている。